

SRA 教材を使用した速読授業の実践
Rapid Reading Using *SRA Reading Laboratory*

林 千賀

成蹊大学一般研究報告 第46巻第1分冊

平成23年11月

BULLETIN OF SEIKEI UNIVERSITY, Vol.46 No.1

November, 2011

SRA 教材を使用した速読授業の実践

Rapid Reading Using *SRA Reading Laboratory*

林 千賀

Chika HAYASHI

1. はじめに

2010年度前期の成蹊大学文学部そして成蹊大学法学部の大学1年生を対象としたCollege English BIの授業では、速読力の向上および学習者の自律性育成を目標として速読練習を行った（詳細は林、2011a, 2011bを参照）。これは授業の一環として毎回の授業の始めに、「時間制限を加えない一斉速読」の形で取り入れた。約3ヵ月にわたる速読練習の結果、クラス全体としては速読指数が伸びただけでなく、学習者それぞれが自分の目標速読指数到達を目指して主体的に取り組み自律性も促すことができた。しかしながら、この実践では統一した速読教材を毎回使用したため、学生個々の英語レベルに対応することは難しく、実際には速読力の数値が伸びているにも関わらず、それを実感できない学生もいたことがわかった。また、学生の取り組みについての省察も、終回授業でしか行わなかったため、学生の意識や思考のプロセスについて十分に理解することはできなかった。但し、終回授業時に行った学生の省察で、学生たちは自分の読みに対する批判的な振り返りを行い、今後のさらなる速読力向上に向けての意欲が窺えた。

そこで前期の速読授業の問題点を踏まえ、同年度後期では、SRA教材を用いて学生個々の英語力を考慮した速読練習を時間制限を加えて行った。また、毎回の速読終了後には学習者に速読の「振り返り」をさせることで、学生の内省の変化を追った。本稿では約3ヵ月の速読実践について、学生の速読指数の伸びや学生のアンケート調査の回答から、その効果について検証するとともに、「時間制限を加えない一斉速読」との比較も含めて今後の速読授業の展望について考察する。

2. *SRA Reading Laboratory 2a* 教材の概要

SRA Reading Laboratory はさまざまな年齢やレベルの学習者を対象に作られ、アメリカ、カナダやイギリスなどでも長年に亘り使用されているリーディング教材である。この教材は全てカード形式になっていて、カラフルなボックスに教材一式が収められている。筆者が使用した*SRA Reading Laboratory 2a*には、*Power Builders*, *Rate Builders*, *Skill Builders*の3種類の教材が含まれている（図1）。

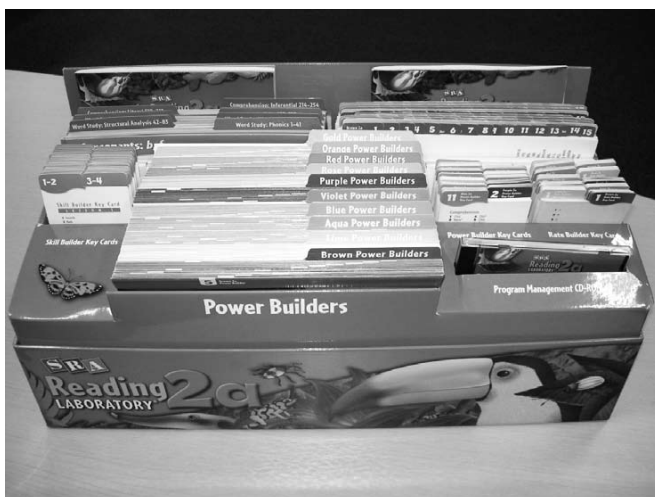


図1 SRA Reading Laboratory 2a
(左奥：Skill Builders, 中央：Power Builders, 右奥：Rate Builders)

3種類の教材はさまざまなリーディングのスキルや目的に対応しており、*Power Builders* は読解及び「多読」用、*Rate Builders* は速読用、そして*Skill Builders* は読解スキルの習得に適した教材である。3種類の教材の内、筆者の授業では速読用教材である*Rate Builders*のみを使用した。教材はレベル別に色分けされ、全部でBrown-Lime-Aqua-Blue-Purple-Violet-Rose-Red-Orange-Goldの10段階からなり、各レベルには15種類の読み物が入っている（図2）。



図2 Rate Builders 教材 (Blue, 1-15)

そして、それぞれのカードにはストーリーとストーリーの内容に関する選択形式の設問が数題ついている。図3はBlueの1のカードであるが、左側にストーリーそして右側に設問が5題という構成になっている。

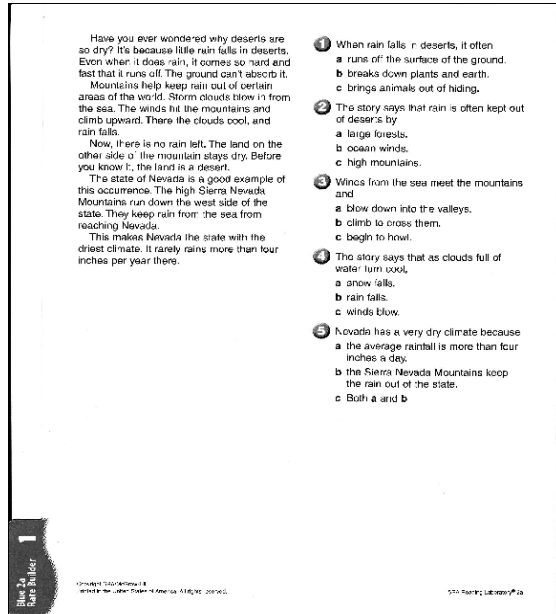


図3 Rate Builders (Blue, 1)

また、それぞれのカードには自己採点用の正解カードも付属している（図4）。

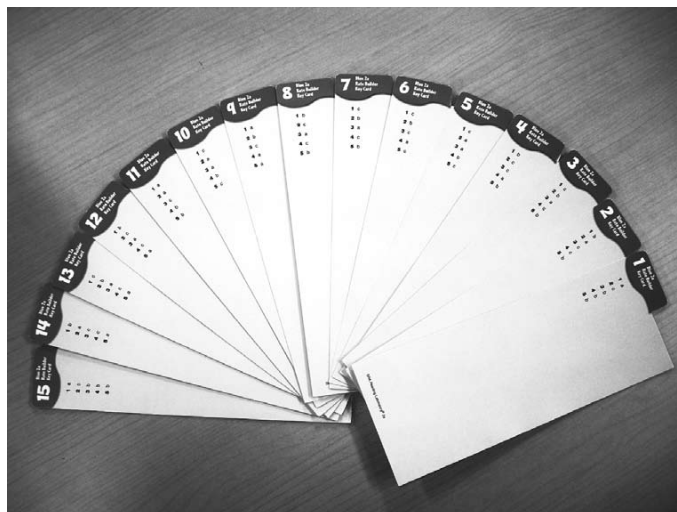


図4 Rate Builders 正解カード (Blue, 1-15)

3. SRA 教材を使用した速読授業の先行研究

近年日本でも、SRA教材は高等学校や大学などさまざまな教育機関でリーディング用教材として用いられている。高等学校での実践研究という形での報告はないものの、横浜翠陵高等学校では高校1年生を対象に、そして東京都市大学等々力高等学校でも英語の授業の一環としてSRA教材を取り入れた実践を行っていることを、それぞれの学校のHP上で紹介している。¹

SRA教材を利用した大学レベルでの実践研究報告についても、その数はまだ非常に少ない。しかし、吉岡・山本・石原・大橋・津熊・野口(1995)は、大学の共通カリキュラム英語の授業の一環として*Power Builders*と*Rate Builders*を組み合わせた独自の取り組みについて報告をしている。具体的には、大学1年生の4コマの英語の授業をそれぞれ「多読」(2コマ)と「精読」(2コマ)に分け、前者の授業でSRA教材を使用した授業を1年間行った結果、学生は英語に対して自信を持ち、速読力を養成することができたとまとめている。また、学生のアンケート調査と担当教員の振り返りからも、初年度の取り組みの成果は満足 of いくものであったとしている。

一方で、*Rate Builders*を用いた速読の実践報告はここ数年で増えている。例えば、King(2010)は大学の英語授業における*Rate Builders*の使用方法について、実際に使用したプリント等を提示しながらその手順について詳細に紹介している。また、柏原(2010)は、ICTを活用した*Rate Builders*の使用について実践報告をしている。CALL教室を使用した速読演習授業では、まず学生がモニターに映し出された教材(ストーリー部分のみ)を1分で読み、次にモニター上に映し出される設問と選択肢のみを見て、学生1人1人が「アナライザー」を使って2分以内に解答を選び、それぞれが答えの確認を行う手順である。² ICTの利点を活用し即時性を重視したこの実践では、大人数クラスでも直読直解の授業が実施でき、速読力を伸ばすことができた結論付けている。この実践では、毎回同一教材を使用しており、学生個々の英語力に応じた教材を選択できないことが問題点として考えられるが、今後ますます注目されるICTを活用した実践として画期的な試みであると言えよう。そして、学生の英語力レベル差を考慮したものとして、高木(2009)は「10分間速読」と称し、大学の一般教室で*Rate Builders*を使用した速読実践の効果について検証している。学生のレベルに合った教材を用いた実践により、全体として速読指数に伸びがみられただけでなく、学生も個々のレベルに応じた1年の速読実践に概ね肯定的であったと報告している。そこで、筆者の授業では、*Rate Builders*の短期間使用での効果を検証するとともに、一斉速読とSRA速読に対する学生の認識について理解すべく、本実践を行った。

1 横浜翠陵高等学校 英語科の授業内容：<http://www.suiryo.ed.jp/senior/study/method/index.html>

東京都市大学等々力中学校高等学校 英語科の授業内容：<http://www.tcu-todorokied.jp/coeducation/kyouka.html>

2 柏原の授業では、パナソニック社のL3(エルキューブ)内のアナライザーを使用したと明記してある。

4. 実践報告

4.1 実践目的

個々の学生のレベルに応じた速読教材を用いることで、それぞれの学生が自分のペースで英文読解の速さと正確さを身につけること、また、主体的に速読練習に取り組むことで学習者としての自律性育成を主たる目的とした。

4.2 受講者

受講者は成蹊大学文学部日本文学専攻で、College English BII（リーディングとライティングに特に焦点をあてた授業）のクラスに在籍する1年生26名（男13名、女13名、再履修者1名を含む）であるが、本稿では事前及び事後の速読力テストの両方を受験した学生15名のみを分析対象とした。この英語の授業は全学共通カリキュラムの英語科目（必修）の1つであり、大学入学時の4月に受験したTOEIC IPのスコアに基づいたクラス編成が行われている。各学部ともに上級クラスを1～2クラス設けているが、本研究ではいわゆる「普通クラス」を対象としている。

4.3 実施期間

2010年度後期の9月から1月の15週（週1回90分）の授業のうち、速読授業は計12回行った。³

3 第12・13回目の授業はプレゼンテーションを行い、第14回目の授業は学期末テストを実施した。

5. 速読授業の手順

ここでは、速読授業の手順について具体的に説明する。まず、初回授業前にオリジナルの速読記録表（以下、「記録表」と略す）を作成した（図5）。

図5 速読記録表

記録表の上部には、現在の学生個人の速読指数、個人の目標速読指数、クラスの目標速読指数そして学生個人の最終速読指数を記入するスペースを設け、正解率の換算表や速読指数の計算方法も記載した。また、記録表の下部には、毎回の速読記録として実施日、教材の色・番号、正解率そして反省や感想を記入させるようにした。

初回授業ではプレテストとして2種類の速読力測定を行った。1つ目は、SRA教材に付属しているレベルチェックテストを使い、スタート時のレベル(色)を決定した。次に、現在の速読指数を確認するために、鳥飼・斎藤・Tozer・Nilsson (2003) の速読教材の一部を用いたテストを行った。テスト終了後に学生には速読指数を計算させ、各自の現在の速読指数そして目標速読指数をそれぞれの記録表に記入させた。記入終了後、記録表を回収し、教員の方でクラスの速読指数平均値を計算した。そして、2回目の授業でクラスの目標速読指数を学生と一緒に決め、クラス全体としても目標到達を目指すべく、学生個々の記録表にも記入させた。

2回目以降の毎回の授業での速読実施の手順は以下の通りである。

- ①教材をグループ（レベル・色）毎に分け、正解カードとともに予め用意した封筒に入れる。封筒の表面には、メンバーの名前と教材番号を明記しておく（図6）。

★Color★: BROWN

Name	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
1.	①	2	③	④	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15						
2.	②	③	④	Pass	Pass	Pass	Pass	Pass	10	11	12	13	14	15	1						
3.	③	④	⑤	Pass	Pass	Pass	Pass	Pass	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7
4.	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9
5.	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
6.	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
7.	7	8	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
8.	8	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
9.	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
10.	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
11.	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
12.	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		
13.	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15			
14.	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15				
15.	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15					

図6 レベル（色）毎に分けられた封筒の表面（Brown）

左側は学生の名前を書く欄にし、右側の上段には速読を行った日付を書くようになってい。そして、該当数字の教材を行ったら数字をマルで囲み、欠席などの理由で行わなかった場合には斜線を引くことにした。また80パーセントの正解率を3回取得できたら、教員の指示で次のレベルに進むことにしたため、Passと書いてあるものはレベルの変更を意味する。

- ②授業開始と同時に記録表を学生に返却する。
 ③上記①の封筒を各グループのリーダー（リーダーは教員が毎回ランダムに任命する）に渡し、教材をグループのメンバー1人1人に配布してもらう。（受け取った教材は裏面にしておく）
 ④制限時間を3分とし、教員は予め黒板に10秒刻みのタイムを書いておく（図7）。

3'00"	2'00"	1'00"	0
2'50"	1'50"	0'50"	
2'40"	1'40"	0'40"	
2'30"	1'30"	0'30"	
2'20"	1'20"	0'20"	
2'10"	1'10"	0'10"	

図7 制限時間を明記した板書

- ⑤ スタートの合図と同時に各自で設問に取り組む。
- ⑥ 教員はストップウォッチを片手に、10秒経過ごとに黒板に書いてあるタイムを消す（図7参照）。
- ⑦ 3分終了の合図後、リーダーは封筒に入っている正解カード（図4参照）をメンバー1人1人に配布する。
- ⑧ 各自で答え合わせをし、記録表に必要な事項を記入する。教員は質問に応じる。
- ⑨ グループのリーダーは教材を回収、そして封筒に入れて教員に返却。
- ⑩ 教員は記録表を回収。次回の授業までに学生の書いたものにコメントを記入する。

終回授業では事後調査を実施し、速読力を測定する。また、目標達成の確認および自己省察を行う。

6. 速読指導

2010年度前期では、「縦読み練習」、「トピックセンテンスと結びを探す」そして「題材直結語彙を探す」の3種類のトレーニングを速読指導の一環として定期的に行った（詳細は林、2011aを参照）。そこで、後期は速読に有効とされる「スキミング」と「スキミング」のトレーニングを随時行った。

7. 結果と考察

7.1 速読力の伸び

事前・事後調査として、初回（2010年9月29日）および終回（2011年1月19日）授業で速読力測定を行った。それぞれの測定で使用したテキストのリーダビリティは8.5で、物理的速読指数を用いたWPMの分布は以下の通りである（表1）。⁴

表1 物理的 WPM の分布比較 (N=15)

速読指数	0	10-	20-	30-	40-	50-	60-	70-	80-	90-	100-	110-	120-	130-	140-	150-	160-	170-
開始時	0	0	1	0	2	1	4	1	2	1	3	0	0	0	0	0	0	0
終了時	2	0	0	0	0	0	2	1	2	2	1	2	1	1	0	0	0	1

(単位：人)

高梨・卯城（2000）は、日本人英語学習者のWPMの平均値は100WPMを下回ることを指摘し、先行研究結果を踏まえ、日本人学習者が目指すべきWPMを100-150としている。これを対象クラスと比較してみると、速読開始時には平均値（100WPM）以下の者がほとんどであり、100WPM以上の者は3名しかおらず、クラスの平均値も72であった。し

4 WPM (Word per minute)は、1分間に読める単語数を表す。実質的WPMは速さのみを対象としているが、物理的WPMは理解度も含めている。

かしながら、速読終了時にはクラスの平均値は90WPMになり、クラス全体としては18の大幅な伸びがみられた。また、100WPM以上の者も6名に増え、170WPMの者も1名いた。

表2は開始時と終了時の物理的WPMの分布を、安藤（1979）の読みのタイプに従って分類したものである。安藤（1979）は、70%の理解度を前提として、100語以下をslow reading、100-150語をnormal reading、150-200語をfaster reading、そして200語以上をrapid readingと定義している。

表2 読解速度による分布 (N=15)

	slow reading (100語以下)	normal reading (100-150語)	faster reading (150-200語)	rapid reading (200語以上)
開始時	12人 (80%)	3人 (20%)	0人 (0%)	0人 (0%)
終了時	9人 (60%)	5人 (33%)	1人 (7%)	0人 (0%)

速読開始時には学生15名のWPMはslow reading (80%) とnormal reading (20%) のいずれかに該当し、slow readingに至っては80%も占めていた。しかし、速読終了時には、slow readingの学生数が60%に減り、一方でnormal readingとfaster readingの数がそれぞれ33%と7%と増えている。速読終了時のWPMのクラスの平均値 (90WPM) は、前述の日本人学習者の目指すべき平均値 (100WPM) にはまだ満たない数値ではあるが、速読練習を通して少しずつではあるが目標数値に近づいてきたと言える。

7.2 レベル (色) の分布

次に、学生が取り組んだ教材のレベル (色) の分布の広がりを見てみたい。表3は、速読練習開始時および終了時の学生のレベル (色) の分布である。

表3 学生の速読練習開始・終了時のレベル (色) の分布 (N=15)

	Brown	Lime	Aqua	Blue	Purple	Violet	Rose	Red	Orange	Gold
開始時	1	2	3	6	1	2	0	0	0	0
終了時	0	1	0	4	5	2	1	1	1	0

(単位：人)

開始時は1番易しいレベルのBrownからVioletまでの6段階にわたる分布で、Blueの学生が最も多く (6人)、続いてAqua (3人) となっている。しかし、終了時にはPurpleのレベルに分布が集中し (5名)、全体で7段階の広範囲の分布になっている。また、速読開始時にはBrownであった学生も1つ上のレベルのLimeになり、1番上のレベルではOrangeに取り組んでいる学生もいた。

7.3 学生の声

終回授業時に、アンケート調査を行った。アンケート項目は吉岡・山本・石原・大橋・津熊・野口（1995）を参考にし、筆者が聞きたい項目も加えた。まず、速読練習開始時の教材の難易度についての学生の意見は以下の通りである（図8）。

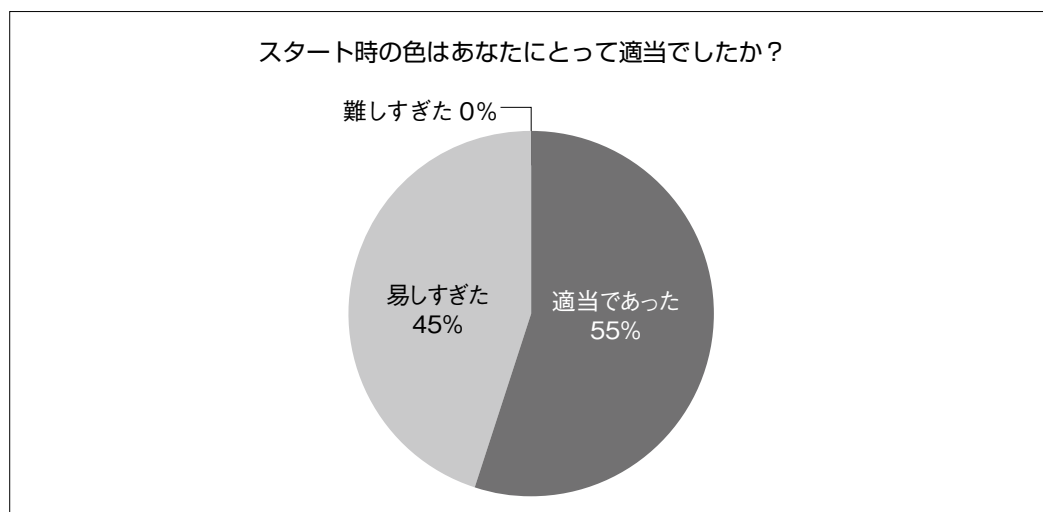


図8 教材の難易度について

図8の通り、「難しすぎた」と感じた学生は1人もおらず、学生はいずれも「適当であった」もしくは「易しすぎた」と回答している。「適当であった」と回答した学生にとってスタート時の速読教材のレベルは、いわゆるKrashen (1985)の Comprehensible Input（理解可能なインプット）仮説の「iプラス1」のレベルであったと言えよう。この仮説では、学習者の現在の言語能力をiとして、それよりも少し上のレベルのインプット（プラス1）を受けると、言語学習が効果的に行われるとされるが、「適当であった」と答えた学生にとっては学習を促進するのに適切なレベルであったと考えられる。

一方で「易しすぎた」と答えた学生は、教材のレベルが「iマイナス1」もしくは「iマイナス2」程度に感じていたのかもしれないが、速読は語彙認識の自動化と関連していることを考えると（自動化の詳細については林、2011aを参照）、スタート時の教材は学生が1語1語の単語の意味に固執することなく、無意識に読みを行うことができ、流暢さを高めるために適したレベルであったと考えても良いであろう。

次に、SRA教材の内容についての学生の意見は以下の通りである（図9）。

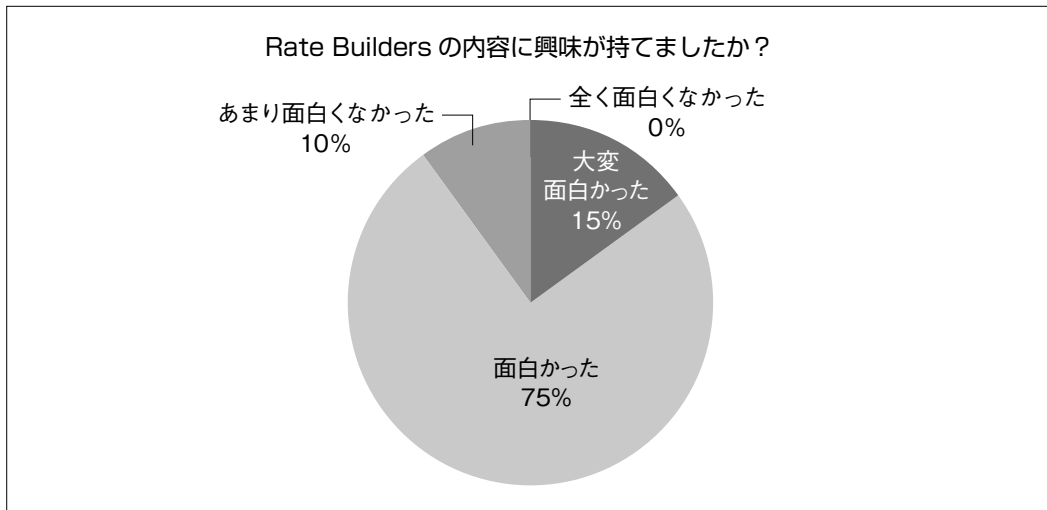


図9 教材の内容について

90%以上の学生が教材内容に興味を持って読んでおり、「あまり面白くなかった」と回答した学生は2名（10%）に留まった。SRA教材で扱っている題材はノンフィクションものも多く、学生は印象に残っているものについて、次のように述べている。

- Purple の温度の伝達についてです。木は温度が伝わりにくい、金属は温度が伝わりやすいなど、材質による温度の伝達について書かれていました。特に、その中にあった「熱いお湯が入ったコップに金属のスプーンを入れると早く冷める」というのが驚きでした。今でもそれだけははっきり覚えていて、家で温めた牛乳やスープや紅茶が熱すぎた時に実行しています。
- 鳥の親の子育ての話で、その鳥は母だけでなく父も一緒に子育てをするといった内容だった。今話題の“イクメン”のようで面白いなと思った。
- 地球の循環について書かれているものが興味深かった。人間は地球に生かしてもらっているのだと感じた。

上記のコメントのように、多くの学生が読んだものは化学、社会、家族そして環境問題などに関連し、学生たちはその内容についてだけでなく、それを自分の経験や考えと結びつけて回答しており、題材が学生にとっても興味深くまた考えさせるものであったことを裏付けるものとなった。

SRA教材を使用した速読練習に対する学生の総合評価は、図10の通りである。

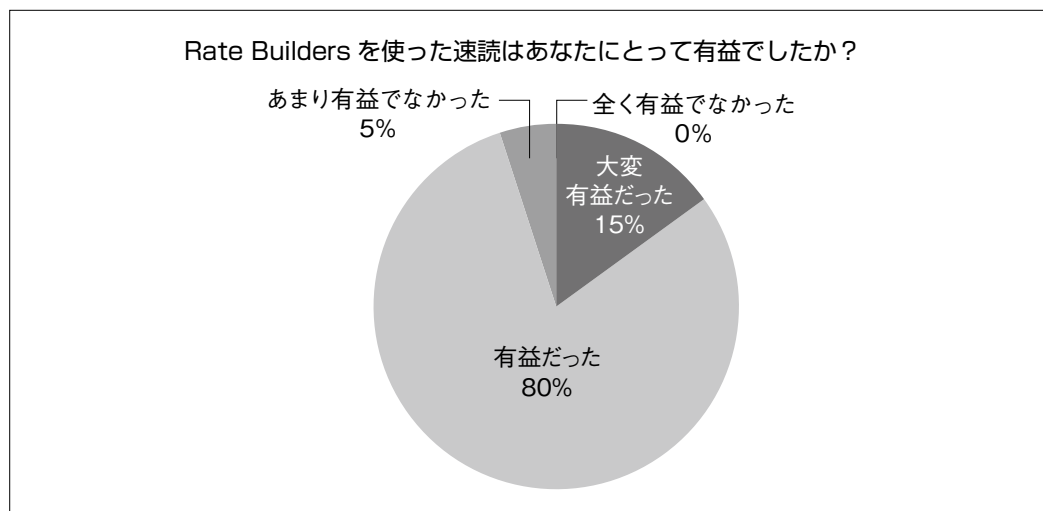


図 10 教材の総合評価

「あまり有益でなかった」と回答した1名（5%）の学生は「思ったように多くの英文が読めなかった」ことをその理由として挙げているが、大半の学生にとってはSRA教材を使用した速読が有益であったことがわかる。そして、「有益であった」また「大變有益であった」と答えた学生がその理由として挙げたものは以下の通りである（図11）。

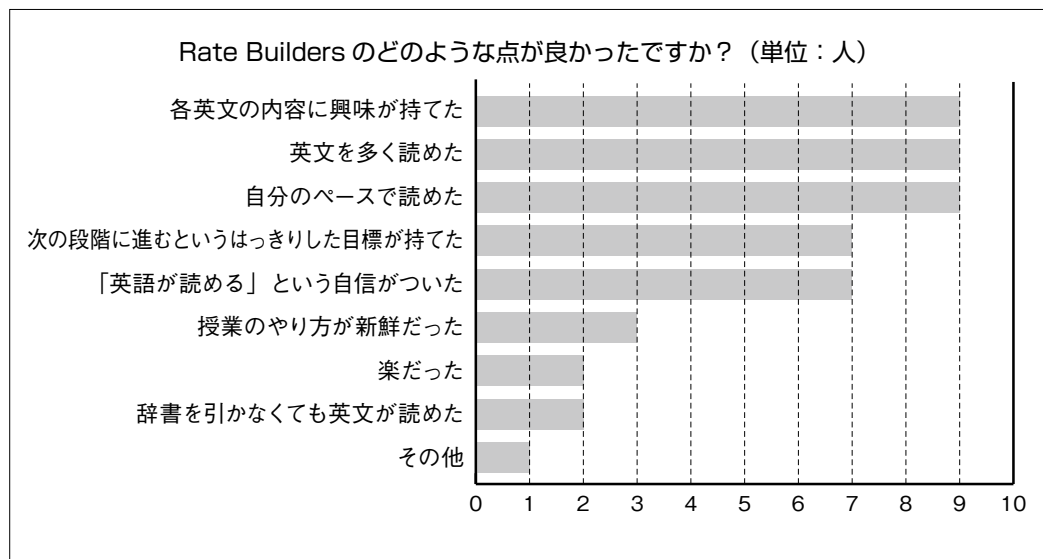


図 11 有益であった点について（複数回答）

図11からは、学生たちが興味のある読み物を自分のペースで多く読めたことに特にその意義を感じていたことがわかった。

これを学生のこれまでの英語学習経験と比較して考えてみたい。下記は学生が大学入学以前に受けてきた英語の授業に関する自由回答形式のアンケート調査結果をまとめたものである。

- 訳読（8名）
 - －教科書を読んで、訳していく。
 - －教科書をひたすら和訳していた。
- 単語と文法の解説（5名）
 - －一文一文丁寧に解説していくもの。
 - －構文や単語を覚える。
- 英作文（1名）
 - －英作文を書いてきて、授業中に発表する。
- 速読（1名）
 - －高校3年のときに入試対策の速読を行った。

アンケート結果より、共通教科書を用いて、指定された箇所を予め読んでおき、授業では和訳したものの確認と単語や文法の解説を行う、いわゆる訳読式の授業を受けてきた学生がほとんどであることがわかった。訳読式では、正確さに焦点が向けられてしまうが故、必然的に読む英文の量が少なくなり、直読直解を行うことが難しいとされる。しかしながら、正確さを重視している訳読式も重要なアプローチであり、今後は中学・高等学校でも訳読式と並行して、語彙の自動認識や類推能力を伸ばすような速読指導をバランスよく行い、お互いに補完するような授業を行うことが望ましいであろう。

また、その他に学生が有益だと感じた主だった理由としては「次の段階に進むというはっきりした目標が持てた」（7名）、そして「英語が読める」という自信がついた」（7名）が挙げられた。これは初回授業で個人そしてクラスの具体的な到達目標を決めたことで、次の段階に進むことが目標達成のプロセスになり、また速読練習を通して1段階ずつレベルが上がるのが励みになったのではないかと考えられる。前期の速読練習の終了時には、速読力がついたら実感している学生は約半数にしか満たなかったが（林、2010a）、SRA教材を使用した速読では学生それぞれが自分の英語力にあった教材を使用して、自分が決めた目標速読指数到達を目指したことで、自分のペースで取り組むことができ、それが学生の自信へと繋がったのではないだろうか。

さらに、SRA教材を使った「授業のやり方が新鮮だった」と3名の学生が回答している。一斉型の授業では学生は受身的になりがちではあるが、SRA教材を使用した本実践では学生たちは到達速読指数を決め、毎回の実践ではグループ内でリーダーとして教材や正解カードの配布を行い、自己採点をし、記録表への記入を行うなど、さまざまな形で学生が主体的に取り組む機会が多かったことも1つの特徴である。このように、

速読のプロセスだけでなく、授業運営全般にも学生を積極的に関わらせ、従来の教師主体の授業体制から教師と学生がクラスまたグループ内でさまざまな役割や責任を共有したことで、授業のやり方に新鮮さや斬新さを感じることに繋がったのかもしれない。

また、少数意見として「楽だった」（2名）そして「辞書を引かなくても英文が読めた」（2名）とあり、いずれの回答も訳読式に関連し、意味のわからない単語を1語1語辞書で引かなくても読めることから得られる感覚そして自信の表れであると推察できる。そして、その他の回答としては「英文の読み方に慣れた」（1名）とあり、毎回の速読実践そして随時行ったトレーニングにより速読に慣れたと実感するに至ったと言える。

最後に、学生には同年度前期に行った「一斉速読」と「SRA速読」を比較させ、どちらの方が良かったかを尋ねた（図12）。

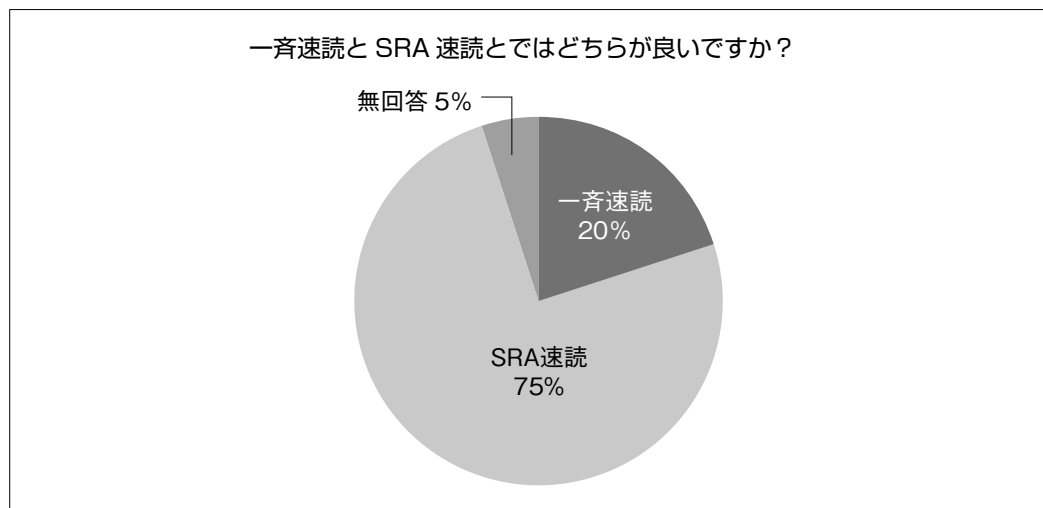


図12 一斉速読とSRA速読に対する学生の考え

図12の通り、「SRA教材を用いた速読の方が良かった」との意見が大半を占めた（75%、10名）。自由回答形式の質問から得られた理由としては、「自分に適した教材が使用できる」（6名）、「自分のペースでできる」（6名）、「レベルアップが面白い」（3名）、「目標が持てる」（2名）、「置いていかれる感じがしない」（1名）、「楽しくできた」（1名）とあり、個人差を考慮したことで、個人のレベル、ニーズやペースに対応することができ、それに対する学生の肯定的な見方そして満足度の高さが窺える。

一方で、「一斉速読の方が良い」と回答した4名の学生は「（一斉速読では）競争心が芽生えてくる」ことを主な理由として挙げていた。確かに、前期に行った「一斉速読」では学生は皆、同じ教材を使用したので、速読終了直後に学生同士でタイムや速読指数を比べ合ったり、読んだ内容についての意見交換などを行うことができた。過度に競争

心を煽ることは望ましくはないが、学生が適度な競争心を持ちながら、それぞれの到達目標を目指して切磋琢磨するような学習環境を作っていくことが今後の課題であろう。また、今回の速読実践では個人で問題を解いた後で自己採点をし、質問があれば教員に聞くという手順であったが、今後は、ある程度終了した段階で、同じ読み物を読んだ学生同士で意見交換をさせるなど、学生間のインタラクションも随時取り入れていきたいと思う。

また、前述の通り、今回の実践では制限時間（3分）を設けたことも前期に行った「一斉速読」とは異なる点である。3分の制限時間に関する学生の意見は、図13の通りである。

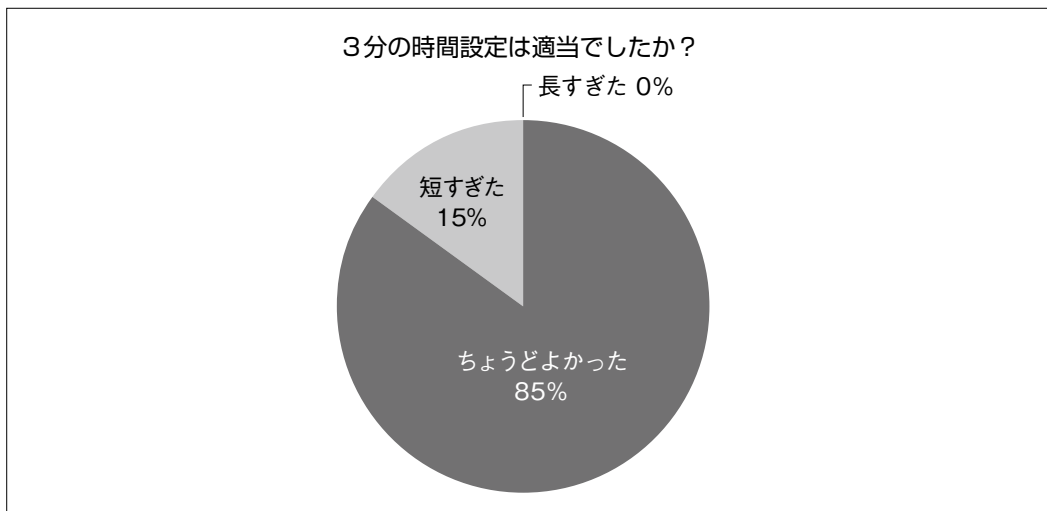


図13 制限時間について

大多数の学生は「ちょうどよかった」と答えており、3分の制限時間は適度な時間設定であったと言えよう。しかしながら、15%にあたる3名の学生は「短すぎた」と感じていた。この3名の学生は回を重ねるにつれて難易度の高いRose, RedそしてOrangeのレベルに取り組んでいたことを考えると、今後はレベルに応じて制限時間を4分に変更するなど時間設定についての検討も必要であることも分かった。

そして、後期より新しく取り入れた速読に時間制限を加えることに対する学生の意見は以下の通りである（図14）。

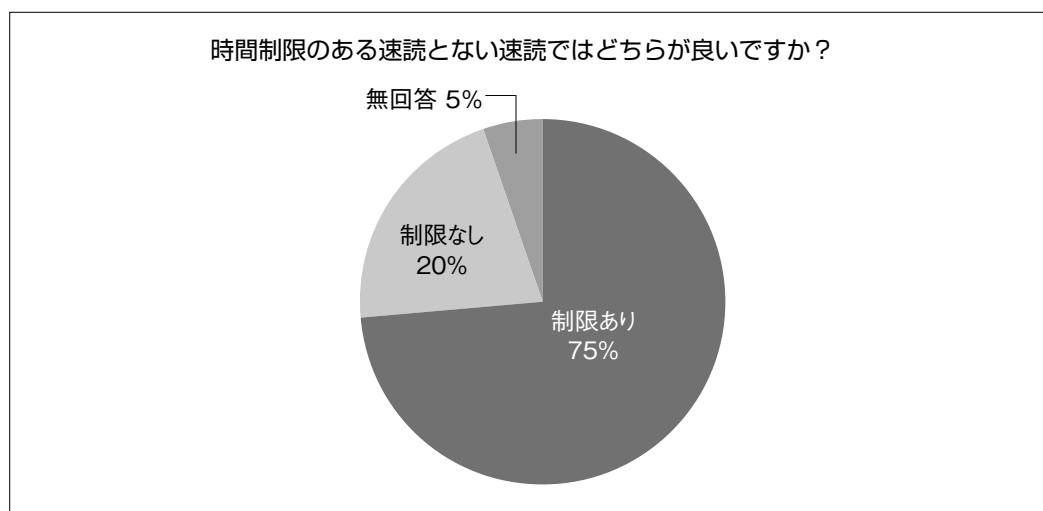


図 14 時間制限のある速読について

図14の通り、「時間制限を設けたほうが良い」と回答した学生が大半を占め、その主な理由としては「緊張感を持って臨める」や「集中してできる」ことが挙げられていた。また、「TOEICの試験対策になる」との意見もあり、学生の意識が各種英語能力試験に向けられ、速読練習で習得したリーディングのスキルやストラテジーを実際の自分の読みに活かしていこうと考えている点も重要であろう。

一方で、「時間制限なし」を希望した学生（4名、20%）は、その理由として「時間が気になって集中が分散された」、「自分の目標設定ができるから」、「自分のペースでやっていきたい。その中で速さを縮めていきたい」と述べている。これらの学生のコメントは、学習者要因の中でも比較的変容が難しいと考えられている「学習スタイル」や「適性」などに関連しており（小嶋・尾関・廣森、2010）、今後は学生個々の英語力の違いとともに学習者要因の影響についても注目していきたいと思う。⁵

最後に、速読について今後も続けたいかどうかを尋ねた（図15）。

5 この他に、変わりにくい要因として挙げられているものは、年齢と性差がある。また、学習者要因の中でも、動機、メタ認知、学習ストラテジーはトレーニングなどにより、比較的変容が容易な要因として考えられている。

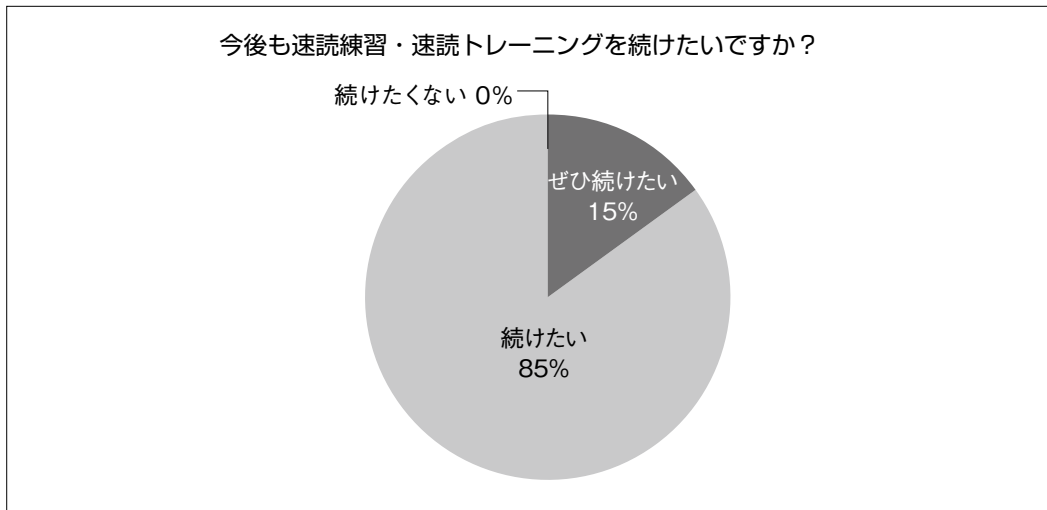


図 15 速読の継続について

前期に行った一斉速読終了時点では、「(速読練習・トレーニングを継続して) 行いたくない」と答えた者が4名いたものの(林, 2011a)、後期のSRA速読終了時点では、学生全員が速読を継続して行いたいと回答していることは特筆すべき点である。多くの学生からは「まだまだ速読力が伸びそう」と前向きな回答が得られ、継続的な速読実践により、学生が自信をつけ、さらなる意欲を掻き立てることに繋がったと言えよう。その中でも特に、スタート時に一番易しいレベルのBrownから始めた学生が「楽しかった」ことを速読継続希望理由として挙げており、SRA教材を用いた速読練習は読みの苦手な学生にとっても楽しさを感じながら取り組むことができるものであったことを示唆している。

8. まとめ

約3ヵ月にわたるSRA教材を使用した速読練習により、クラス全体として速読指数に伸びがみられ、短期間の使用でも速読力向上に効果があることがわかった。また、学生はそれぞれのレベルに合った読み物を興味を持って読み、自分のペースで無理なく速読を行ったことに意義を感じているという結果も得られた。そして、全学生が速読練習の継続を望んでおり、SRA教材を使用した速読が学生の向上心を高めることができたと言えよう。

最後に、今後の課題として「教材の使用」、「実践」そして「研究」の3点から考察したい。まず、1点面はSRA教材の使用に関するものである。SRA教材については、2010年度現在、本大学では国際教育センター内の多読教室に保管されており、学生が授業外で自由に使用することはできない。しかし、本調査より得られた学生のSRA教材の内容に対する興味や速読力の伸びを考えると、今後、SRA教材が積極的に利用されることが望ま

しいといえるであろう。またSRA教材の特徴を考えると、授業外でも自習の形で利用することも可能であり、今後は授業外でも使用できるような学習環境を提供していきたい。

2点目は実践面に於けるものである。今回の実践では個人差を考慮することで、学生個々のレベルやペースに応じた速読を実践することができた反面、学生間のインタラクションの機会が非常に少なかった。今後の実践では速読終了後に学生同士が活発なやりとりができるような工夫が必要である。また前述のように、学生の中には一斉速読では競争心が芽生え、それがモチベーションに繋がると考えている者もあり、今後は一斉速読とSRA速読の両者の利点をうまく取り入れた速読授業を行っていきたい。

3点目として、今回の実践では実施期間が約3ヵ月と短かったが、今後は同じ学生を対象としてSRA教材を使用した速読練習を1～2年間継続して行い、その長期的な効果についても検証していきたい。また、今回はSRA速読に対する学生の「声」についてはアンケート調査を通して得たが、今後は学生の意見をよりよく理解するために、個人もしくはグループインタビューをデータ収集法として取り入れていくことも検討したい。

引用文献

- 安藤昭一 (1979). 「速読の方法」 波多野完治著. 『読む英語』 103-131. 研究社。
- 林千賀 (2011a). 「大学英語授業における速読指導の効果」 『成蹊英語英文学研究』 第15号、59-76.
- 林千賀 (2011b). 「自律した学習者育成を目指した大学英語授業における速読指導」 『成蹊大学一般研究報告』 第44号第7分冊、1-10.
- 柏原郁子 (2010). 「ICTを活用した英文速読演習の試み - CALL教室におけるSRA *Reading Laboratory*®: *Rate Builder*の活用」 『人間科学研究』 第12号、1-13.
- King, G. A. (2010). Reading folders: A warm-up for reading classes. (pp. 11-20). *Extensive Reading in Japan*. The Journal of the Extensive Reading SIG of the Japan Association for Language Teaching.
- 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (2010). 『成長する英語学習者：学習者要因と自律学習』 東京：大修館書店。
- Krashen, S. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. London: Longman.
- 高木亜希子 (2009). 「リーディング授業における10分間速読指導」 『中部地区英語教育学会研究紀要』 38, 315-320.
- 高梨康雄・卯城祐司 (2000). 『リーディング事典』 東京：研究社。
- 鳥飼慎一郎・斎藤早苗・Tozer, G., & Nilsson, K. (2003). 『英文スピードリーディング初級編』 東京：アスク。
- 吉岡公美子・山本岩夫・石原浩澄・大橋克洋・津熊良政・野口メアリー (1995). 「大学1回生必修英語における多読授業の実践 - SRA *Reading Laboratory*を利用して -」 『立命館教育科学研究』 6, 141-152.

Appendix

2010年度後期College English BIIアンケート

後期の授業について振り返り、以下の設問に答えてください。また、あてはまるものにはマルをつけてください。

SRA速読教材 (Rate Builders) について

1. あなたのスタート時の色は何でしたか。
(a) Brown (b) Lime (c) Aqua (d) Blue (e) Purple (f) Violet (g) Rose (h) Red
2. あなたのスタート時の色はあなたにとって適当でしたか。
(a) 適当であった (b) 易しすぎた (c) 難しすぎた
3. あなたは合計で何種類の色を読みましたか。
(a) 1 (b) 2 (c) 3 (d) 4 (e) 5 (f) 6 (g) 7 (h) 8 (i) 9 (j) 10
4. Rate Builders の内容に興味が持てましたか。
(a) 大変面白かった (b) 面白かった (c) あまり面白くなかった (d) 全く面白くなかった
5. Rate Buildersの教材で読んだものの中で、印象に残っているものについて教えてください。(色もわかる人はそれについても教えてください。)
6. Rate Buildersについて、3分という時間設定は適当でしたか。
(a) ちょうどよかった (b) 短すぎた (c) 長すぎた
7. Rate Buildersを使った速読はあなたにとって有益でしたか。
(a) 大変有益だった (b) 有益だった (c) あまり有益でなかった (d) 全く有益でなかった
8. 設問7で(a)と(b)と答えた方、どのような点が良かったですか(3つまで選択可)。
(a) 各英文の内容に興味を持てた。
(b) 英文を多く読めた。
(c) 自分のペースで読めた。
(d) 次の段階に進むというはっきりした目標がもてた。
(e) 「英語が読める」という自信がついた。
(f) 授業のやり方が新鮮だった。
(g) 楽だった。

- (h) 辞書を引かなくても英文が読めた。
- (i) その他

9. 設問7で(c)と(d)と答えた方、どのような点が良くなかったですか(3つまで選択可)。

- (a) 各英文の内容に興味を持てなかった。
- (b) 思ったように多くの英文が読めなかった。
- (c) 自分のペースで読めなかった。
- (d) 英文が難しすぎた。
- (e) 英文が簡単すぎた。
- (f) 負担が大きすぎた。
- (g) 辞書を引いて確かめることができなかった。
- (h) その他

10. 前期に行ったような(1)速読をみんなで一斉に行うものと、後期のような(2)それぞれがSRA教材を使用して行った速読とではどちらがよいですか。いずれかにマルを付けてください。

- (1) 一斉速読の方が良い ・ (2) SRA教材を使用した速読の方が良い

11. 設問10の理由を教えてください。

12. 前期と後期の速読のやり方について、(1)時間を制限せずに行った速読(前期)と(2)時間を制限した速読(後期)とでは、どちらが良いですか。いずれかにマルをつけてください。

- (1) 時間制限あり ・ (2) 時間制限なし

13. 設問12の理由を教えてください。

速読トレーニングについて

14. 以下の速読トレーニングについて、役立った順番に数字を書いてください。

- (ア) 縦読み練習 () (イ) 題材直結語彙を探す ()
(ウ) 段落のトピックセンテンスと結びを探す ()
(エ) スキャニング () (オ) スキミング ()

15. 今後も速読練習・速読トレーニングを行いたいですか。

- ア. ぜひ行いたい イ. 行いたい ウ. 行いたくない

理由：()

☆改善点などがあれば教えてください。

これまでの学習の振り返り

16. みなさんが大学入学以前に受けてきたリーディングの授業について教えてください。

PRINTED BY
SEIKO-SHA CO. LTD.
1-5-15, NISHITUTUJIGAOKA, CHOUFUSHI, TOKYO

Seikei University
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,
Tokyo, 180-8633 Japan